

---

# とある刹那の負荷加速《オーバードライブ》

常火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある刹那の負荷加速<sup>オーバードライブ</sup>

### 【Nコード】

N9430Z

### 【作者名】

常火

### 【あらすじ】

ある少年が第三位になった事から始まる物語。物語はあるべき姿からかけ離れ、刹那となる。

彼はどこから来たのか、少年の正体を知る者はいない。ただわかることは何時でもそこにいると言うだけ。

彼には観測者としてここに来てもらっているだけだ。byビーカーの中の人間。

【オリジナルであったり、原作沿いであったりと結構適当に書くつもりです】

## 第一話（前書き）

とある科学の超電磁砲のゲーム、皆さんはもう買いましたか？  
僕は買おうか買わないか迷ってます。（それ以前にお金がない）  
では、第一話始まり！！

## 第一話

さて、困ったものだ。

どれ程困っているかと言うと俺が居候させてもらっている友人が毎回毎回、事件を持ち帰ってくるのと同じくらい。もちろん美女付きで、な。

いや、しかし、どうなのだろう。美女が付いてくる時点であちらの方がマシとも言えなくもない。ただ一つ、美女全員が友人に惚れていることの除けば……。たった一つ、その所為でいつもあいつの隣にいる俺は地獄のような苦しみを味わっている。

うん、やっぱりこっちの方がマシだな。

「オイ、コラア！！無視してんじゃねえぞ！！アア！？」

「今なら土下座して俺等の靴舐めたら許してやんよ！！ギャハハハハッ！！」

困ったなあ。物凄く困った。やっぱり慣れない事はするもんじゃないなあ。たまには我が友人を見習ってみようかと思っただが。やはり、うん、失敗した。

俺の前には五人の男達が下品な笑い声を上げている。如何にも不良ですと言わんばかりの格好をしている。別にこの人達が能力者だろうが無能力者だろうがあまり問題ない。

本当に問題なのは男達の向こうにいる人間だ。バチバチと紫電がその綺麗な茶髪から流れているの見るだけで本当に億劫になる。

「あ！！やつと見つけたわよ！！私と勝負しなさい！！」

常盤台のお嬢様が戦闘狂とは、やはり知っていたとはいえ流石にそれが現実になるとショック以外の何物でもない。別に俺は女性にメルヘンな気持ちを抱いてなんかない。そんなものはとつくの昔、正確には友人と暮らすようになってからだが、性欲の処理をした後のティッシュの如くゴミ箱に捨てた。しょうもない下ネタに走った事については謝る。だが後悔はしていない。

「めんどくさい、だるい、おなかへった、かあちゃんばんごはんまだ〜?」

どうして俺はこんな挑発するような言葉を口から吐いてしまうのだろうか。もしかして、心の底ではこの少女と戦ってみたいと思っているのだろうか。だとしたら笑える、俺も戦闘狂の資質があるというのか。

「ふざけんじゃないわよ!!アンタはこの私を抜いて第三位になったのよ?納得できるわけないじゃない!!」

「え〜。だるい〜」

ガキか、こいつは……。ガキなんだろうなあ、中学二年生だし。一番バカな年頃だ、戦闘狂になるのも頷ける。それよりもあまり大きな声で第三位とか言うな、照れるだろうが。だが、それと同時に虚数の八番目なんて不名誉な二つ名が街中で囁かれているのだ。またそれが俺にピッタリなのが腹立たしい。

「アア!?コイツまさか……。昨日ニユースでやってた新しいレベル5か!?オイ、テメエ等!!コイツを潰せば……」

リーダーらしき男が手から炎を生み出す。紅蓮に輝くそれは渦を巻きながら球体をかたどっていく。見る限りではレベル4と言ったところか。この男どうして不良なんかしてんだ?十分エリートだろうが、勿体ない事この上ない。他の四人も何やら能力を発動している。そいつ等にしてもレベル3くらいはあるだろう。普通に暮らせばいいのに……。

「死ねえええええええ!!」

ボスモブ（モブキャラのボス）が馬鹿でかい炎の球を俺に目掛けて投げつけてきた。まるで小さな太陽みたいだ。と言うかこんな威力のものを人に向けて投げるとは何事か。許せん。

「おい、ピカチュウ。よく見とけ」

「誰がピカチュウよ!!」

では、見せつけるとしようか。この俺の能力を。

たぶん視認することなどできないだろうが、それでも結果だけを

見せつければ十分だ。

演算を開始すると同時に俺の能力が発動した。

「え？」

まず、聞こえたのはそんな呆けた声。

超電磁砲、電撃姫、ピカチュウこと御坂美琴が口から放ったのはそんな間抜けな声だった。その反応を見ただけで俺は満足できた。「アンタの能力初めて見たけど、どうなってるんのよ……」

「見ればわかるだろ。こいつ等ボコっただけ」

顔を腫れあがらせて地面に倒れている不良達を指さしながら俺はさも当たり前のように答えた。拳の痛みを必死に隠すことを忘れずに。後で薬局に行つて湿布を買わなくては……。予想外の出費だ。

しかし、美琴が呆けるのも無理はない。こいつからしたらそれは一瞬にも満たないのだ。瞬きをするよりも短い間の出来事なのだから。

「そんなのは見ればわかるわよ。聞いているのはどうやって、方法を聞いているの」

そんなもの教えるわけないだろう。そんな簡単に種明かしをしたら面白くもなんともないし、何よりもミステリアスな男はモテるはずなのだから。

「テレポートです」

その瞬間、電撃の槍が俺に向つて飛んできた。もちろん、そんな攻撃も俺に対しては無意味だが。

「どうして当たらないのよ!!」

「当たったら死ぬだろうが!？」

電撃は俺の数センチ横を通り過ぎて行った。正確に言うと、俺が0、00000000001秒前(かなり大雑把)前にいた所を通り過ぎて行った。ここは路地裏なので、電撃が表通りにいた通行人

に直撃しなかつた事を祈ろう。

「とにかく、私と真剣勝負しなさい!!」

「わかつた」

「いいから勝b……へ?」

「だから、その真剣勝負を引き受けるって言ったんだ」

美琴の性格からして勝負するまで追いかけることは必須。俺は彼女の性格を全部理解している。ならば、今ここでこの戦闘狂に現実とやらを見せつけてやった方が後々が楽なのだ。

「場所は……あそこでいいだろ?ほら、上条が初めてお前と戦ったあの河原」

「いいけど……ってあれ?アンタがどうしてその事知ってんのよ?まだその時って私達会ったこともなかつたでしょうが」

「まずい。ミスった。ボロが出た。あまり調子に乗りすぎるとダメだなあ……」。

俺は額に冷たい汗が流れるのを感じながら愛想笑いを浮かべる。

「上条から聞いたんだよ。お前との思い出の場所だつて言つてたぞ?」

「そ、そんな事ノノノ」

ああああああああ!!!!あの野郎、やっぱりボコボコにしないと気が済まないツ!!

「おい、いつまで惚気てんだ。これから勝負するんだろ?」

「惚気てなんかいいわよ!!」

まったく、腹が立つことこの上ない。

「夕焼けが二人を照らしている。彼等はこれから己のすべてを賭け

t  
」

「変なナレーション挿んでんじゃないわよ!!」

そうか?こういう時って雰囲気は大切だと言っじゃないか。

「そんなもの大切にするのなんかアンタだけよ」

俺達は今、例の河原に来ている。夕日の光が眩しい。今日の夕飯の当番は上条だから問題ないだろう。そうでなかったら美琴の狂言の相手なんかしていない。俺の他にもう一人シスターさんが居候しているのだが、物凄く暴飲暴食なのだ。それはもう思っていた以上に。だから、当番の日には台所で地獄を見る羽目になる。

「じゃあ、そろそろ始めるか」

俺達はお互いに向き合う。距離は大体5メートルほど。俺からは手を出さない。まずはレディーファーストだ。紳士はそのことを決して忘れてはいけないのだ。

美琴の体の周りをバチチツと青白い電流が迸っている。おそらく、人を簡単に焼き豚にできる威力だと思われる。中学二年生の少女なのに物騒なことだ。

「おいおい、その電流は見かけ倒しか？お前から仕掛けてきてもいいんだぞ」

「じゃあ、遠慮なくやらせてもらおうわ！！」

そんな台詞を吐きながら美琴は地面を蹴って俺に向ってくる。筋肉に微弱な電流でも流しているのか、その速さは異常である。そんな考察をしている間に俺の懐に潜り込んだ彼女はハイキックなるものを入れてきた。しかも、俺の首に。

そんな事をすればどうな事態になるのか想像できないらしい、この娘は。

まあ、俺は俺でそんな攻撃簡単に避けることが出来るのだが。彼女は様々な技を俺に向けてくる。そのどれもが簡単に人を殺せるようなものなのが恐ろしい。まったく、こいつは将来、格闘家にもなるつもりなのだろうか。

「アンタのそれ、どう考えてもテレポートじゃないでしょ」

息を切らしながら、俺を睨み付けてくる。そもそも肉弾戦なんか俺には無意味なのだ。例えばそれがどんな速さを誇っていたとしても「テレポートって事にしといてくれ。説明するのが面倒臭いし、ネ

「タバレしたら勝負にならないだろう?」

「私の知り合いにテレポーターがいてね、それがどんなものかよく知ってるのよ」

「ああ、あの百合っ子ちゃんね。会ったことないけど、一度会ってみたいな。」

「へえ。じゃあ、優しい俺が君にヒントを上げよう。俺に物理的な攻撃なんか意味を成さない」

「今の俺はおそらく人生で一番のドヤ顔になっているはずだ。少し、恥ずかしい。」

「そんなのヒントって言わないわよ!!」

「ピーピーとうるさい小娘だな。十分にヒントだと思う、お前が俺に勝てないって言う事実そのものなのだから。」

「……………」

「どうやら先程の独り言が口から出ていたらしい。美琴が纏う電撃がゾツとするような音を立て始めた。」

バジジジジツバジツバジジジジツ

彼女の足元の雑草が一瞬で黒炭と化している。流石に俺もあれを喰らうと死ぬだろう。

そんな軽い危機感を抱いていると、俺の足元から突然黒い何かが生えてきた。それは俺を覆い隠すようにして球体となった。すっかり砂鉄の事を忘れていた俺のミスだ。

「 なッ!?! 」

「 捕まえた!! 」

「してやったりと嬉しそうな、勝利に酔った声が腹立つことこの上ない。」

「だが、これだけでは終わらないのが電撃娘だ。なんと、この娘はポケットからコインを取り出し、指に乗せやがった。まさかの超電磁砲である。この絶対に避けられないであろう状況にその技を向けるとは何事か。彼女は人殺しになりたいらしい。」

「そして、何の躊躇もなく黒い球体に向けてブツ放しやがった。球

体となっていた砂鉄は跡形もなく吹き飛び、黒い燃えカスと言うか何というかよくわからない跡だけが残っていた。

「……え？」

呆然とした美琴の声。この声を聞くのは本日で二回目である。何に対して呆然としているのか。まさか俺が何の行動も起こさなかった事に驚いているのか、それとも、俺が跡形もなく消し飛んだ事に驚いているのか。後者だとしたら恐ろしいものである。ゲーム感覚で人殺し、まさか本当に死ぬとは思ってませんでしたって感じか？

「人殺しの気分はどうだ？お嬢ちゃん」

俺は美琴の背後から声を掛ける。その通り、俺は砂鉄に捕まっただけでいなかつた。そもそも、あれに捕まっていたら、美琴が超電磁砲の様子など説明できる筈などないのだから。

「ひッ！！」

ビクリと肩を震わせてこちらを向く美琴の顔を見て俺は仰天した。その目はまるで泣いているかのように赤かったのだ。もしかしたら、夕日の所為かもしれない。

「……泣くならあんな事しなかつたらよかつたじゃないか」

正直に言つと俺が泣かしたみたいで何か嫌だ。そして俺は美琴に近づいて行く。ハンカチでも持ち歩いていた方がよかつたな。今度セブンスミスとにでも買いに行こう。

「泣いてなんかないわよ！！」

だが、そんな俺の気遣いもむなしく、この小娘は電撃の槍を飛ばしてきやつた。さすがに今のは俺もカチンときた。

「はい、終了」

俺は彼女の額にお得意（上条曰く、とてつもなく痛いらしい）のデコピンを放った。一応、女の子なので威力は抑えはしたがそれでもバガンと変な音が響いた。

「ッ！？いったああああ」

美琴は驚きと共に額を抑えてしゃがみこんだ。いちいち大袈裟なガキだな。まあ、驚くのは無理もないか。俺と美琴の距離は三メー

トル程あったが、彼女にとっては一瞬でそれこそ 初めから目の前にいたように俺は移動していたのだから。

「じゃあ、俺の勝ちって事でバイビ〜」

死語となった台詞を吐きながら俺は友人宅へと帰宅した。

## 第一話（後書き）

オリ主、落ち着いた人間ですが後々キャラが崩壊します。僕ことうい  
うキャラの人間って苦手なんでw w

これに懲りず第二話も読んでくださると嬉しいですよ。

あと感想なども送ってくださいると嬉しいですよ。よろしくです!!  
では、また!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9430z/>

---

とある刹那の負荷加速《オーバードライブ》

2011年12月29日14時46分発行